

第七章 空蟬の物語(3)

[第一段 空蟬、伊予国に下る]

伊予介、神無月(かんなづき、陰暦十月初冬)の朔日(ついたち、上旬)ごろに下る(任国へ赴く事になった)。女房の下らむにとて(妻帯での下行という事で)、たむけ(源氏は餞別を)心ことに(格別弾んで)せさせたまふ(御贈りに為られた)。また、内々にも(内密で空蟬には)わざとしたまひて(別に用意して)、こまやかに(丹念に)をかしきさまなる(細工を施した)櫛、扇多くして、幣(ぬさ、供え布)など態とが増しくて(わざとがましくて、特に増やして其の中に紛らせて)、かの小桂も遣はず(空蟬が脱ぎ捨てた例の小桂諸共に拵えて、贈答の遣いを立てられた)。

「逢ふまでの形見ばかりと見しほどに、ひたすら袖の朽ちにけるかな」(和歌 4-17)

「ほんの一寸と思ったら、一寸もそつとも無しのない交ぜ」(意識 4-17)

こまかなることどもあれど(いろいろあるが)、うるさければ書かず(煩わしくなるので書かない、として贈歌を添えられた)。

御使、帰りにけれど(源氏からの贈り物の御使者は帰ったが)、小君して(空蟬は小君を遣って)、小桂の御返りばかりは聞こえさせたり(小桂の御礼の返歌だけは申し上げた)。

「蟬の羽もたちかへてける夏衣、かへすを見てもねは泣かれけり」(和歌 4-18)

「現せ身に返したはずの夏衣、届いてみれば此処も空蟬」(意識 4-18)

*「蟬の羽の」は薄いものの意で「衣」に掛かる枕詞。「たちかへてける」は「裁ち替へて着る一仕立て直す」と「絶ち返て来る一終えて戻る」の複意。「かへすをみても」は「衣替えすれば」と「裏を見れば一逆に言えば」との複意。「ねはなかれ」は「根は無かれ(生地が根が無い一糸が細い)」と「音は泣かれ(声を出して泣く)」との複意。また「子は無かれ」とも読める。「子」はネズミで十二支の一。また方角の北で、北の方たる空蟬自身を示すので、「子は無き」とは「私は居ない」ことになる。そこで是の歌は先ず、「薄布を仕立てて夏衣にしたが生地が弱いので今の衣替えの時期に冬衣の役には立たない」、という一筋が読めて、強いて言えば「間に合わない」という意を示して、身分違いの不毛な恋を嘆くとも解せるが、少々理が立って穿ち過ぎの嫌いがあるので、是は強い意を持たない複線ないし捨て意だろう。次に、「蟬の羽として御返し頂いた夏衣ですが逆に縁切りのように寂しさに泣けて声まで漏れそうです」、という意が読めるが、是が返意としても妥当なので返歌の本意なのだろう。そしてもうひとつ、「少しでも寒さしのぎにと単衣を御返し下さる様な情けを掛けて頂いても人の妻なる私はやはり姿を消し去ります」、という空蟬らしい言わずもがなの意まで深読み出来る仕掛けになっている。それだけに此の意が余韻として残り、是の歌を印象付けている。

「思へど(返す返す)、あやしう(稀に見る)人に似ぬ(人並みはずれた)心強さにても(頑なさのままで)、ふり離れぬるかな(振り払って行ってしまったな)」と思ひ続けたまふ(と思ひ続けられる)。今日ぞ(今日はちょうど)冬立つ日なりけるも(立冬だったが)、しるく(それらしく)、うち

しぐれて(時雨の一雨もあって)、空の気色いとあはれなり(空の色が随分陰っている)。眺め暮らしたまひて(源氏は終日、物思いに暮れて独詠為された)、

「過ぎにしも今日別るるも二道(ふたみち)に、行く方知らぬ秋の暮かな」(和歌 4-19)

「海人と(言う)夕顔、(伊予)弥よ空蟬、何れ淋しい秋の夕暮れ」(意識 4-19)

なほ(これで)、かく(このような)人知れぬことは(人に憚る恋路は)苦しかりけりと(懲り懲りだど)、思し知りぬらむかし(源氏は思い知られたかもしれない)。かやうの(こうした)くださしきことは(込み入った話は)、あながちに(源氏がせいぜい)隠ろへ(隠れて)忍びたまひしも(恋慕されていらしたものを)いとほしくて(いじましく思って)、みな(事情を知る側仕えの女房たちも皆)漏らしとどめたるを(口外せずに居たものだが)、「など(何故に)、帝の御子ならむ(帝の御子である)からに(からと言って)、見む人さへ(情交した相手までも)、偏成らず(かたほならず、欠点なく)物褒め勝ち(ものほめがち、褒めてばかりいる)なる(のか)」と(と此の物語を)、作りごとめきて(作り物のように)とりなす人(言い触らす人が)ものしたまひ(中には御出でに成ったり)ければなむ(するものですから、敢えてお話申し上げたので御座います)。あまりもの言ひさがなき罪(端為たない語り草の罪は)、さりどころなく(御容赦下さりませ)。

(2009年2月9日、読了)